東海女子大学紀要，6，1986

ことわざ論考

－その社会的機能－

大　宮　録　郎

Ⅰ．心理学とことわざ

心理学が私たちの身近に起こる事象を解明しようとするとき、それを、たとえば、実験的方法によって行うのも、ひとつの手法である。事実、心理学は科学であろうとすることから、先進諸科学にならって、実験的方法を好んで用いる。確かにその結果には説得力があり、人びとはそれを見て納得する。しかし、あえてそのような手法によらなくとも、すでに私たちの間でなじみになっていることわざを用いることで、より簡明にその目的を達成し得るのではないであろうか。次に、例をあげてそれを明らかにしてみよう。

刺激のないところに感覚、知覚は生じないので、ものがどう見えるかは、当然外的条件によって規定される。しかしそれとともに、それは、そのときの人の心理状態がどうであるかという内的条件によっても、左右される。

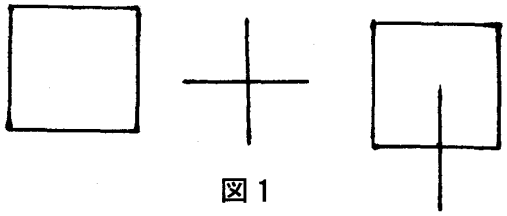

図１

いま、図１の一番左の図のような正方形を３回つづけて、スクリーンのうえに映し出す。次に、中央の図のような十字を、同じく３回つづけて映す。これを交互に繰り返していくと、やがて見ているほうは、「こんどは十字だな」「十と予想を立てるようになる。そうなったところで、右の図のような正方形と十字が組み合わさった図を、はじめはぼんやりと、そうして徐々にはっきりするような仕掛けをして見せる。ここでどのような認知が生じるかというと、もしそのとき正方形が示される番にあたっていれば、正方形はごく早いうちに認められるが、十字の部分は図形がかなりはっきりしてからでないと、認められない。ところが、逆に十字が見える番に当たっていたとすれば、十字の部分は早くから認められるが、正方形にはなかなか気づかない。要するに、そのとき正方形、十字のどちらが映し出される番になっているかという予想、あるいは期待が、同一の刺激図形の認知に影響することが、そこに示されたわけである。

しかし、これは、そのような煩雑な手続きによらなくとも、昼間見れば、なんの変哲もない枯れすすきが、夜道をびくびくしながら歩いているときに見れば、幽霊にも見える

幽霊の正体見たり枯尾花

ということわざを引用すれば、それで十分といえるであろう。

もうひとつ、これは実験的例証ではないが、葛藤場面についてのレヴィン（Lewin, K.）の所説をとりあげてみる。私たちの行動が生じる環境のなかにある事物、事象のあるものは、私たちをそれにひきつけさせ、また別のあるものは、私たちをそれから避け遠ざからせる。もちろん、それはその事物、事象がもっている性質によって決まるが、一方、そのときの私たちの欲求がどうであるかによっても、異なってくる。このよ

うに、環境内の事物、事象が私たちをひきつけるとき、それは正の誘意性(valence) をもつといい、また、それが私たちを避け遠ざからせるとき、それは負の誘意性をもつという。現実の生活場面では、私たちはこの正、負さまざまな誘意性をもつ事物、事象にとり囲まれているわけであり、正の誘意性をもつ事物、事象へ向かう心理的な力(vector)と、負の誘意性をもつ事物、事象から退こうとする心理的な力との間に立って、いずれにすべきか戸惑うが、これが一般にもよく知られている葛藤場面である。ゲシタルト心理学派を代表するひとりであるレヴィンは、この葛藤場面の基本的な形式を3つあげ、そのそれぞれについて、次のように図示し、説明している。

(1) 人が2つの正の誘意性の間に位置する場合（接近 — 接近型葛藤）図2（A）

(2) 人が2つの負の誘意性の間に位置する場合（退避 — 退避型葛藤）図2（B）

(3) 正と負の誘意性が同じ方向にある場合（接近 — 退避型葛藤）図2（C）

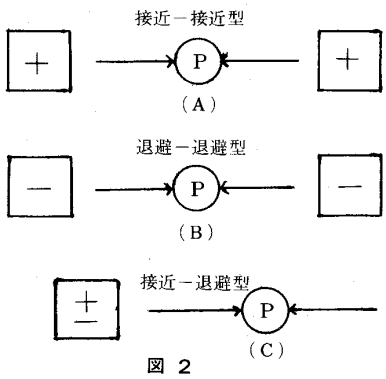

図 2

この葛藤の3つの基本的な形式の設定は、きわめて適切であり、私たちが日常の生活場面で、〝右すべきか左すべきか〟に迷う状況を余すところなく表している。しかし、私たちにとっては、そのそれぞれに次のような説明を加えるならば、より理解しやすくなるにちがいない。

(1) 接近 — 接近型葛藤について

有名な頼　山陽の「日本外史」のなかにある、後白河法皇と父清盛との間に立ち、去就に迷う平　重盛の話を持ち出すのも考えられるが、それよりも簡潔に

心は二つ身は一つ

ということわざをあげる。

(2) 退避 — 退避型葛藤について

それが〝一難去ってまた一難〟といった意味にとられることもあるが、ここではことばどおりに〝前門に虎を防げば、後門に狼が進む〟と素直にとらえ、

前門の虎後門の狼

ということわざをあげる。

(3) 接近 — 退避型葛藤について

当世フグの毒に当てられて死亡するといった話は、ほとんど耳にしなくなったが、一般によく知られている

河豚は食いたし命は惜しし

ということわざを、または、

痛し痒し

見たし怖し

などのことわざをあげる。

心理学研究における常識の重みを説くのは、宇津木　保氏である。氏は「心理学が厳密な科学的心理学になり得ない根本的な理由は、心理学の研究対象である人間が倫理的な存在であり、実験者が自由にコントロールし得ないものだという点にある」といい、さらに「心理学が、その方法が厳密でないという理由で常識心理学を非難するのは、いわば〝五十歩百歩〟で、むしろ、心理学の方から、常識心理学に学ぶべきものがあっても不思議ではないと思われる」と述べている。

常識は広い視野と経験の豊かさを強みにして、格別、組織立った実験や調査を行わなくても、長い歴史のなかで、平常は出会わないような極端な事件をもふまえて、簡潔な結論を導き出す。また、ときにはそうした結論を導き出すことなく、ただありのままの事実を述べるにとどまり、そこに提示された知識の利用は、利用者の手にゆだねる。

ところで、ことわざは、多くの人びとの知識を常識としてとらえ、その雑然とした集合にある程度まとまりを与えたものと解することができる。

このように常識を高く評価し、それとの関連でことわざの意義を高めることから、通常〝科学的〟心理学が扱ういくつかの問題を、ことわ

ざを使い、全く新しい視点に立って解明している宇津木氏の「ことわざの心理学」には、共感を覚えるところが大きい。

II．ことわざの本質

ここで、あらためて、〝ことわざとは何か〟を辞典によって調べてみると、ことわざとは「古くから人々に言いならわされたことば」とある。（広辞苑）　つまり、ことわざも言い習わしのひとつである。しかし、ことわざには、一般の言い習わしとはどこかちがった点があるはずである。

ことわざの3S要素ということがいわれている。その3つのSとは、shortness(手短さ)、sense(いわゆるセンスの良さ)、それにsalt(塩辛さ)である。やはり、ことわざが多くの人びとによって口にされ、また記憶にとどめられるためには、冗長であってはならず、できるだけ簡潔でなければならない。といって、ただ簡潔でありさえすればよいというのではない。もし、表現が平板であったならば、人びとの注意をひくことにはならない。そのためには、センスの良さが求められる。それと同時に、多くのことわざに期待されるのは、

山椒は小粒でぴりりと辛い

というか、

寸鉄人を刺す

鋭さ、塩辛さである。前述のことわざについての説明の後に、「教訓、風刺などの意を寓した短句や秀句」とあるのは、まさにこのことわざの3Sを意味している。

ひと口にことわざといっても、その内容はさまざまである。たとえば、遊戯的ことわざといってよいものがある。笑いのテクニックのなかから生まれたもので、

恐れ入谷の鬼子母神

驚き桃の木山椒の木

といった類のことわざが、これに入る。なかには、

桜に鶯（木がちがう＝気がちがう）

傘屋の小僧（骨を折って叱られる＝割りに合わない）

のように、クイズめいたものもある。一見してわかるとおり、別に内容的にどうということはなく、軽口、地口として座興的に口にされるまでである。これに対して、経験的ことわざとよんでよいものがある。地域社会というよりは村落共同体の内部で、長老たちがその長い実生活の経験から得た知識を、後の世代に伝えようとするねらいにもとづいて生まれたもので、

旱に不作なし

桜伐る馬鹿梅伐らぬ馬鹿

などのことわざが、これに入る。経験的ことわざでいわれていることの大部分は真実であり、したがって幾分かは教訓的な性格をもっているといえよう。しかし、

四目十目は不縁のもと

などになると、たとえそれが経験的に生まれてきたとしても、実証されることではないので、俗信の部類に入れられることになる。

元来、ことばは人びとの間に好ましい人間関係をもたらすのに、重要な役割を果たしている。ところが、

物は言い様で角が立つ

の段階からさらに進んで、どうにもならない対立関係に到達すると、そのことばが相手を非難、攻撃するのに、また重要な役割を果たすようになる。それが、

馬鹿の一つ覚え

とか、

怠け者の節供働き

といったような、攻撃的ことわざである。前に〝寸鉄人を刺す〟といったが、この攻撃的ことわざでは、とりわけ相手の弱点をずばりと、しかも簡潔に指摘するところに、その特徴がある。

しかし、なんといってもことわざのなかで圧倒的に多いのは、教訓的ことわざである。その多くは、経験的ことわざと同様に、たとえば、

出る杭は打たれる

のように、だれいうということなく生まれてきている。ところが、教訓的ことわざには、それをならんで、古典からの引用によるものや、有名人が口にした箴言（しんげん）に端を発する

ものが少なくない。前者の例としては、「論語・爲政篇」にその出典が求められる。

温故知新

が、また後者の例としては、武田家の菩提寺である慧林寺の僧快川が口にしたという

心頭滅却すれば火もまた涼し

があげられる。参考までにいえば、これは中国の詩人杜荀鶴の詩(「夏日悟空上人ノ院ニ題ス」)

安禅必ずしも山水を須いづ、心頭を滅却すれば火も自ら涼し

から出ている。しかし天正12年、甲斐の武田が織田信長に攻められ、寺が焼き討ちに合ったとき、快川が火炎のなかで端座し、この句を唱えつつ焼死したということで、一般によく知られている。

前に言い習わしについて調査研究を行ったことがある。その際、数多い言い習わしのなかで、とくに熟知度が高かったのは、

ごはんを粗末にすると目くらになる

ごはんを食べてすぐ横になると牛になる

夜爪を切ると親の死に目に会えない

などの、子どものしつけに関係したものであった。つまり、内容的にはおよそ非科学的であっても、それらが現実の社会に存在するそれなりの理由、今日的な意義があったのである。言い習わしの一種とも見なされることわざにあっても、このことは当てはまる。それどころか、うえにあげたような言い習わしとは異なり、ことわざには一面の真理が含まれているだけに、今日的な意義はさらに強まろう。これがことわざの社会的機能であり、この点については後に詳述する。

とまれ、これまで遊戯的ことわざ、経験的ことわざ、攻撃的ことわざ、教訓的ことわざと、順を追って述べてきたが、ことわざ辞典などを見ると、それらのうちでも、最後の教訓的ことわざが他を圧して多いように思われるのは、やはり、その今日的な意義があってのことである。

III. ことわざの解釈の変化

情は人の為ならず

ということわざがある。これは、「なさけを人にかけておけば、めぐりめぐって自分によい報いが来る。人に親切にしておけば、必ずよい報いがある」(広辞苑)と解釈するのが普通である。いうまでもなく、それは仏教の因果応報説に由来している。ところが、現代の若者にその意味をたずねてみると、「ある人に対して、その人のためにと思ってしてやることが、必ずしもそうはならない場合があるので、むしろそうしてやらないほうがよい」「情をかけると、その人が自力で物事をする気がなくなり、ためにならない」といったような答えをする者が、かなりの数にのぼるそうである。

情が仇

的な解釈をする者が少なくないということである。そうして、この結果からすれば、上述の〝正解〟は、現代の若者にとっては、不純、功利的と受けとられもしよう。

ことわざの解釈をめぐってのこのようなズレは、それを〝今どきの若い者は〟論に結びつけて終われるほど、簡単ではない。

旅の恥は掻き捨て

というのも、よく耳にする。これも、広辞苑によれば、「旅では知っている人がいないから、どんなことをしても恥辱にはならない」と説明されている。とりわけ閉鎖的な社会にあっては、それぞれ特有な生活慣習、しきたりがあり、しかも世間の目が厳しいため、人はそれから逸脱した行動に出るのを自重しなければならない。また、不本意な自粛、自戒は欲求不満をもたらし、人はそのハケ口を求めたくもなる。ところで、そうした日々の拘束から解放されて旅に出る。旅先で出会う人は、人ではあっても、自分が所属する村落共同体のメンバーである人とはちがう。そこで、なんら恥じることなく、傍若無人な行動にも及ぼうというのである。

しかし、これは最近の解釈であり、昔はちがった意味があったという説がある。民俗学者の宮本常一氏は、次のように語っている。

「違った秩序の社会にはいっていくと、自分のもっている習慣とはくい違いが出てくる。そういうくい違いが起こってきたための失敗が

恥であるわけですが、その恥を見捨ててもらわなきゃ、他処者はそこに生きられない。それが『掻き捨て』という意味だというんです。」(コミュニティ」34号　1972)

村落共同体にはそれぞれ特有の生活慣習、しきたりがあり、その締めつけが厳しいことは前に述べた。それが順守されることによって、秩序が保たれている。人は、もしそれに違背した行動をとれば、〝村八分〟になり、共同体からはみ出してしまう。これは、土着の者であれ、他処者であれ変わらない。つまり、他処者は、

郷に入っては郷に従う

ことが要求される。しかし、すでにひとつの生活慣習を身につけている他処者にとっては、それは容易ではないので、〝恥を掻く〟ことにもなる。ここでは、この他処者、旅人に対して同情的な立場に立ち、それを大目に見て欲しいというのである。新旧の解釈には大きなズレがあり、しかもその新しい解釈での〝誤解〟は、前の〝情は人の為ならず〟の場合とちがって、老いも若きもなのである。

秋茄子は嫁に食わすな

ということわざも私たちにとってなじみ深い。これについても、同様のことがいえる。このことわざは、通常、姑の嫁いびりの意味で使われている。霜が降りるころになって結実するうらなりの茄子は、皮が薄く、たねが未熟で柔らかく美味なので、嫁には食べさせるなというのである。しかし、これは誤った解釈で、うらなりの茄子からは種子がとれないことにもとづいて生まれた、たねのない茄子を嫁が食べると子どもができなくなるという俗信を信じて、嫁にはそれを食べさせるなと理解するのが、正しい解釈であるという説がある。そうであるとすれば、このことわざは、むしろ丈夫な後継ぎの子どもを生んでもらうために、姑が嫁を大事にする意味になり、通説とは全く逆になる。

〝情は人の為ならず〟の誤用、誤解釈についての一通の投書をきっかけとして寄せられた多くの意見をまとめた、新聞の記事がある。(読売新聞、昭和59・6・29)そのなかで、国語学者の見坊豪紀氏は、「世間ずれする」を「世間の感覚がずれている」と解釈したり、「住めば都」を「住むなら都」と理解したりする例をあげ、故事成語や慣用句の乱れが、ことわざの乱れに連動していると述べている。そうして、その乱れは、小・中学校のカリキュラムのなかで、それらについての学習が軽視され、「適宜に教える」程度に扱われていることによると主張し、

「このわざや慣用句の中には確かに現代社会に受け入れられずに淘汰されていくものも多い。だが、一通の投書をきっかけに顕在化した誤用の問題は、とかく文化や伝統的なものを軽視しがちだった戦後教育のつけが回ってきた、と思えてならない。」

と結んでいる。

この戦後の教育のあり方に対する批判的な見解には、一応うなずけるところがある。しかし、よく考えてみると、ただカリキュラムを改正し、国語の授業時間数を増加しさえすれば、ことわざの誤用、誤解釈の問題は解決するであろうかという疑問も、その一方に生じる。

誤用・誤解釈の否定は、〝正用・正解釈〟を前提としてのことである。正しく用いるためには、正解を知っていなければならない。また、共通に理解される固定した解釈があるとしなければ、その〝正解〟は成り立たないわけである。ところが、ことわざのような短句型式のものは、必ずしも固定した意味が定着しているものばかりではない。時代の推移はその意味に変化をもたらすと考えてよい。このように、時代によることわざの解釈の変化とそれがもたらすことわざの多義性に目を向け、貴重な意見を述べているのは、滑川道夫氏である。滑川氏は「ことわざ読本」のなかで、次のようにいっている。

「前出の〝情は人のためならず〟の場合も、仏教が庶民生活にひろまり、浸透した時代には、〝情〟は温情慈恵であり、〝人〟は〝他人〟の意味で、他人に温情をかけてやることは、けっして他人だけを益することではなく、因果はめぐりめぐって、いつかは報いられるのである。だから他人には温情をかけてやるといい。おそらく庶民仏教のさかんな時代にできたことわざであったろう。時代によっては、報いられる期

待を持って情をかけるといった功利打算にアクセントがおかれて理解されてきたと思われる。打算を離れた純粋な愛情は、他人のためだけのものではなく、情をかけてやることは自分のためなのだという意味である。

ところでこのことわざを、現代的状況のなかで文字通り読むとき、〝情〟を子どもへの愛情と解して〝過保護〟の意にとれる場合があり得るだろう。過剰な愛情をかけるとその子のためにならないものだ。というふうに過保護をいましめることわざと解釈する現代の読み手がいたとしても、それを誤用・誤解釈と一蹴していいだろうか。その解釈を誤りとするならば、そのことわざの発生当時の解釈だけを正解とするか、古い解釈だけを正しいとしなければならなくなるだろう。つまり、後の時代の人がその時点の状況に結びつけて解釈すれば、古い時代の解釈とちがったものになる可能性をもっているのである。」

歌は世につれ世は歌につれ

というが、ことわざの解釈もそのときどきの世相、人情を反映させて然るべしということになろう。そうして、この意見に従えば、たねのない茄子を食べると子どもができなくなるという俗信がすでに通用しない現代において、また、もはや、

旅は憂いもの辛いもの

ではなくなった昨今、〝秋茄子は嫁に食わすな〟や〝旅の恥は掻き捨て〟の〝誤用・誤解釈〟が生じるのは、当然といえよう。

Ⅳ．ことわざと国柄

ここまで述べてきたことは、文化的背景、精神的風土が異なれば、ことわざの解釈も変わることがあると、いいかえてよい。

所変われば品変わる

で、その極端な例が、国がちがえば、一見したところ同じようなことわざでも、意味内容が大きく異なっていることである。

言語社会学者鈴木孝夫氏の著書には啓発される点が多いが、その一冊である「ことばと社会」のなかに、次のような例が紹介されている。それは

転石苔を生ぜず

ということわざについての話で、イギリスの辞典にもこれと同じ

Rolling stone gathers no moss.

というのが出ているという。わが国の場合、それは商売をしばしば変えては、損あって得なしと解するのが普通であるが、アメリカ人のなかには、

If you keep on moving, you will not get rusty.

のように、それとは正反対の意味にとる人がいるそうである。というのは、戦後間もないころ、日本人の高級住宅を強制借用したアメリカ軍の将校が、せっかく苔むしていた庭の石燈籠を、ワイヤーブラシで白く磨きあげてしまったというように、アメリカ人にとっては、mossというのはきたならしい、いやなもの、金属の錆と同じものととられることがある。そのために、自分の能力がフルに発揮できるような地位を次々と求めて、たえず努力すれば、錆つかずに成功すると理解されいるからであるという。そうして、鈴木氏はこれを、アメリカにおける社会移動（social mobility）に対する積極的な評価と、アメリカ人の苔に対する評価が、日本人のそれとは正反対であることに起因すると説明している。

同様の例は、奥津文夫氏の「ことわざ・英語と日本語－その特質と背景」のなかにも見いだされる。それは、

小人閑居して不善を為す

と、

Doing nothing is doing ill.

とのちがいについてである。前者は、本来中国のことわざであるが、「小人物は暇でいると、ろくなことはしない」という意味である。しかし、後者の場合は、doing nothing ＝ doing illなのであるから、「なにもしないでいることは、もうそれだけで悪をなしている」ということを意味している。つまり、人間はこの世の中に生まれてきた限り、世のため、人のために積

極的に善をなす義務が（神に対して）あるとされているのに対して、古来〝人から後ろ指さされない人間になる〟のを理想としている日本人の、人間はただ悪いことをしさえしなければよいといった消極的なものの考え方、生活態度がそこにうかがわれると、奥津氏は指摘しているのである。

なお、それを裏づけるために、日本人は〝桜の枝折るべからず〟〝芝生に入るべからず〟のような〝……するべからず〟式の否定的表現を好むとし、以下に示すような日英の表現の比較が試みられているのは、興味深い。

Rely on yourself.
人に頼るな

Cigarettes Only.
葉巻ご遠慮ください

Hung wet on hunger.
しぼらずに干してください。

Love me, love my dog.
坊主憎けりゃ袈裟まで憎い

V　ことわざの社会的機能

1、矛盾することわざ

教訓的なことわざが圧倒的に多いことは、すでに述べたとおりであるが、ここに新たな問題が登場する。それは、教訓的とはいいながらも、矛盾した内容のことわざが、これまた多いことである。次に、思いつくままに、それを対であげてみる。

正直の頭に神宿る
正直者が馬鹿を見る

嘘つきは泥棒の始まり
嘘も方便

渡る世間に鬼はない
人を見たら泥棒と思え

好きこそ物の上手なれ
下手の横好き

先んずれば人を制す
急いては事を仕損じる

石橋を叩いて渡る
当って砕けよ

念には念を入れよ
過ぎたるは及ばざるが如し

君子危うきに近寄らず
虎穴に入らずんば虎子を得ず

二兎を追う者は一兎をも得ず
一石二鳥

長いものには巻かれろ
和して同ぜず

我が身をつねって人の痛さを知れ
己をもって人をはかるな

二度あることは三度ある
何時も柳の下に泥鰌は居らぬ

天は自ら助くる者を助く
果報は寝て待て

立つ鳥後を濁さず
後は野となれ山となれ

君子に二言なし
君子狗変す

芸が身を助ける
粋が身を食う

子を見ること親に如かず
親の欲目

氏より育ち
氏素性は争われぬ

瓜の蔓に茄子はならぬ
鳶が鷹を生む

大器晩成
栴檀は双葉より芳し

血は水よりも濃し
兄弟は他人の始まり

持つべきものは子
子は三界の首枷

腐っても鯛
騏驎も老いては駑馬に劣る

これらはその一部で、まだまだあるであろう。それならば、これをどう理解すべきであろうか。以下、その点を究明していく。

2、タテマエとホンネ

かって「政治意識と投票行動」について調査をしたことがある。そのなかで、〝次のような議員のうち、あなたがもっとも好ましいと思うのはどれですか〟と設問し、選択肢として(イ)こまめに身近な問題で世話を焼いてくれる人、(ロ)会合などのとき、すすんで金品を寄贈してくれる人、(ハ)地元の利益代表的な活動をする人、(ニ)全体的な立場に立って政治を考える人の4つを用意してみた。その結果は、(イ)が16.8%、(ロ)が1.8%、(ハ)が21.8%、(ニ)が51.0%、その他・わからないが8.6%であった。これをどう見るであろうか。あえて(イ)を世話焼き型、(ロ)を金品寄贈型、(ハ)を利益代表型と呼ぶのに対して、(ニ)を理想型と名づけることにする。もしもここに示されるように、世話焼き型や金品寄贈型、利益代表型がそれほど多くなく、理想型が過半数を占めるのであれば、今日いろいろと問題になっている選挙に法外な金がかかること、いわゆる圧力団体と称するもののゴリ押しによって政治がゆがめられることなど、選挙や政治をめぐってのおかしな現象は見られないはずである。つまり、この調査結果はひとつのタテマエであり、ホンネは別のところにあると考えなければならない。行動への構え、準備体制が態度であり、それが言語的に表現されたのが意見である。前者は行動に直結しているので、行動との間にそう大きなズレはないものの、後者はワン・クッションをおくだけに、必ずしもそこに真実が述べられない。とくにこうした調査にあたって、質問に価値観念が含まれるとともに、それについての社会的な締めつけがつよく感じられると、ホンネとは異なったタテマエが、それだけはっきりと露出するわけである。

試みにタテマエとホンネを辞典（広辞苑）であたってみると、両者とも詳しい説明はなく、たてまえ（建前）＝表向きの方針（旧版では標準、方針、原則）、ほんね（本音）＝本心から出たことば（旧版も同じ）とあるだけである。ということは、これらのことばが私たちにとってなじみ深く、ことさらに説明するまでもないととられたためであろう。人は相寄って集団、社会を構成する。集団、社会を構成するのは、最終的にはお互いに協調、協力することによって、

三人寄れば文殊の知恵

で、個々の人では成し遂げられないことを可能にさせるためである。あくまでも協調、協力を前提としている以上、全体を統括するルールが必要である。それは慣習、しきたりから法的な規制に至るまで多岐にわたる。ときには、後にも述べるような生活信条、座右銘的な意味をもつものであることもある。ルールの多くは自然発生的であり、そうでない場合にしても、人びとの合意の所産であるはずである。ところが人びとの間にいつのまにか上下の身分関係が生じてくると、上位の者の恣意によって、それが一方的に定められることも起こってくる。たとえば、

君君たらずとも臣臣たらざるべからず
親親たらずとも子子たらざるべからず

に、それがうかがわれる。これに対して個々人にはやはり恣意があり、ルールどおりには行動

したくないことがある。とりわけ上から押しつけられたルールに対しては、それが顕著である。もっとも、ルールからの違背には有形無形の制裁があり、そこに個人の恣意はかなり抑制される。ともかくも、以上に述べてきたところから集団、社会の表向きの方針、標準、原則としてのタテマエと、その集団、社会に属する個々人の本心から出たことば、恣意にもとづく行動としてのホンネが生まれてくる。したがって、タテマエを〝かくあるべし〟(sollen)、ホンネを、〝かくある〟(sein)と、またその両者の間に大きな隔たりがあるとすれば、理想と現実ととらえることもできる。

なお、増原良彦氏の「タテマエとホンネ」を見ると、そのなかで「タテマエとホンネがしきりに言われるようになったのは、第二次世界大戦後ではないかと思う」と、かなり大胆な見解が述べられている。増原氏によると、無条件降伏で迎えた敗戦は過去の国家の全面否認であり、その結果

「国家というものはうさんくさい存在であり、国家が国民に教えるイデオロギーや、国家が国民に対して発する命令は、すべていかがわしいものだとする感情が大衆のあいだで定着してしまったのである。国家ばかりではない。あらゆる機能集団が、いかがわしい存在とされた。そして、それがいかがわしい存在であるが故に、その機能集団に属する個々の構成員が集団と別個に、いわば集団に対抗して、自分だけのホンネを持つ権利があるかのように思われたのだ。そのようなホンネに対して、国家や集団のもつタテマエが措定されたのである。」

ということになる。かなり大胆なといったが、この見解には納得し難い点がある。そのひとつは、タテマエあってのホンネと考えるが、ここではそれが必ずしも明確でない。もうひとつは、確かに戦後、国家や集団の統制力、規制力が、戦前のそれのようにつよくなくなったのは事実である。しかし、それは無条件降伏での敗戦云々ということよりも、むしろ戦後の日本の社会の民主化がもたらした自由思想の普及（それが価値感の多様化として表れることもある）、場合によってはその行き過ぎ、はきちがえによると理解したほうが適切であろう。それに、義理と人情、オモテとウラということばをも含めれば、タテマエとホンネの問題は、ことさら戦後にということではない。それはそれとして、増原氏がタテマエとホンネを日本人論のキイ・ワードとしていること自体は、間違ってはいない。つまり、このタテマエとホンネを考慮しなくては、私たちの日常行動は十分に解明できないのである。

さて、以上のようにタテマエとホンネの問題をとらえるならば、矛盾する意味内容をもつことわざが多数見いだされるのは、結局、私たちがそのなかで日々を過ごす集団、社会にタテマエとホンネが存在することの反映と理解してよいのではないであろうか。

すべての人がタテマエどおりに行動すれば問題はない。行動の予測も立てられようというものである。しかし、数多くの人間のなかにはホンネで行動する者も出てくる。そうしてそこに戸惑いを感じさせられるのである。たとえば、人は相みたがいと相互扶助の精神に徹して行動したところ、裏切り的な行動に出会うことがある。慎重のうえにも慎重を期して事に当たった結果、人に後れをとってしまうことがある。人の気持ちを大いに忖度して人に接するように努めたのが、かえって下司の勘ぐりと受けとられて、人間関係に支障をきたしてしまうこともある。日ごろ血を分けたきょうだいだからと格別の親近感をもっていたのが、たまたま金銭上の問題にからんで、あらためて他人を感じさせられることもある。渡る世間に鬼はない——人を見たら泥棒と思え、念には念を入れよ——過ぎたるは及ばざるが如し、我が身をつねって人の痛さを知れ——己をもって人をはかるな、血は水よりも濃し——兄弟は他人の始まりは、それぞれこうした状況のもとに生まれてくるのである。つけ加えるならば、タテマエとホンネは集団、社会によって入れ替わることがあり、また、同じ集団、社会でも、時代の移り変わりによってそれが逆転することがある。さらにまた、タ

テマエで行動し、他人のホンネに当惑していた自分自身が、やがてはホンネで行動し、他人を当惑させるようにもなるというように、事情は複雑である。

3、ことわざの社会的機能

これまで述べてきたのは、究極的にはことわざが集団、社会のなかでどのような役割を果たしているか、その社会的機能はどのようなものであるかということにほかならなかった。前に集団、社会全体を統括するルールが、ときには生活信条、座右銘的な意味をもつものであることもあると述べた。ここではそれに関連して、直接ことわざの社会的機能に言及することで、本論文の締めくくりとする。

集団全体に関係のある事柄について、その成員の大部分がもつ意見が世論である。通常、この世論は政治の領域の問題として扱われている。しかし、それが作用するのは、政治の領域だけに限られず、広く経済、教育、道徳、風俗など、日常生活のあらゆる領域に及んでいる。それならば、これらの諸領域において、世論はどのような役割、機能を果たしているのであろうか。

世論が果たす機能は、大別すれば、規範的機能と支持的機能の2つになる。規範的機能とは、一定の事態のもとでどのように考え、行動すべきかを人に指示し、あるいは強制するはたらきである。これに対して、支持的機能とは、その人がどのように考え、行動すべきかを定めるにあたって、ひとつの基準を与え、またそれに従って行動するのを外部から支援するはたらきである。たとえば、このようなことをしたならば世間の物笑いのたねになるであろうと考えて、ある行動に出るのを慎しんだり、あるいは実際にそれを行って手きびしい批判を受けたりしたとすれば、それは世論の規範的機能によるのである。一方、あることを行うにあたって、それについて多少の心苦しさや不安の念をいだいているとき、他の人びともそれには同情的な立場をとってくれるであろうと考えたり、あるいは実際にそれを行ったところ、人びとの賛同し、称賛する声が聞かれたりしたとすれば、それは世論の支持的機能によるといってよい。

さて、ことわざも世間一般の声、集団、社会に共通するひとつの見解、意見と理解するならば、ことわざ、とりわけ教訓的ことわざにおいて、この世論の機能論の適用が可能である。ただし、ことわざは他から強制されるのではなく、人が自らすすんでそれを受け入れるのであるから、支持的機能の面が重視される。つまり、人はそれに生活信条、座右銘的なもの、別のことばでいえば、処世訓、人生訓を求めるわけである。そうして、事が意のごとく運び、日々の生活がまさにわが道を往くであれば、そこに満足感を覚え、自信の念を一段と高めることになる。しかし、いわゆる

当て事と越中は向こうから外れる

ことがあるので、いつも自分が考えるとおり、期待するとおりに事が運ぶとは限らない。そこには違和感、挫折感、ときには自己嫌悪感が起こるにちがいない。その際、あたかもそれを待ち構えていたかのように設けられていたのが、これまでよりどころにしていたのとは相反する意味内容のことわざであり、人はそれに新たな支持的機能を求めて、自ら納得するのである。

前のタテマエとホンネのところで論じたのは、人が集団、社会のルール、つまりタテマエに従って行動、生活しているにもかかわらず、他の人が恣意的、ホンネ的に行動、生活するのに当面する場合に、意味内容のうえで相互に矛盾することわざの存在意義を見いだすということであった。しかし、この場合は、そのタテマエ的な行動、生活の指針は他から押しつけられたのではなく、自ら選択し、採用したのであるから、状況は少しく異なる。具体的にいえば、渡る世間に鬼はない、念には念を入れよ、我が身つねって人の痛さを知れ、血は水よりも濃しを生活信条、処世訓としたのは、いずれもその人自身なのである。ところが現実にそうした生活信条、処世訓が通用しない場面に出会うとすれば、それがあくまでも自己の責任であるだけに、心の動揺、心的緊張は大きいと考えなくてはならない。そうして、それをうえに違和感、挫折感、あるいは自己嫌悪感と表現したまでである。

ともあれ、人は欲求不満に当面した場合、現実の問題解決にはなんら向かわず、もっぱら高まる緊張を解消し、あるいは緩和し、一時的にも自我の安定を得ればよいという行動に出ることが多い。これは、広い意味での適応に入ると考えられることから、感情的適応とよばれ、また、たとえ変則的ではあっても一種の内的緊張の処理であることから、自己調節作用ともいわれる。この感情的適応はさまざまな形で現れるが、もっとも一般的なのが合理化である。一例をあげれば、試験に失敗し、その原因が能力不足、準備不足以外のなにものでもないとき、それを率直に認めれば、自分が傷つく。そこで、たとえば「あのときは身体の調子がわるかったので」とか、「予想外の問題が出たので」と、結果的にそうならざるを得なかったのだと自己弁護し、自分の行動や立場を正当化して自我の動揺を防ぐ。こうした類のものである。

いま

渡る世間に鬼はない

を生活信条、処世訓として日々を過ごそうと志す。しかしすでに述べたように、人生は意外にきびしく、期待にそわないような出来事に出会う。心の動揺は否定できない。その生活信条、処世訓を否定し、取り下げれば、あらためて自分の甘さを認めることになり、大きく傷つく。それを避けようとして、無意識的に合理化を試みるとき、ふと脳裏に浮び、口に出るのが、同じ人間関係にかかわりながら、およそ意味内容を異にすることわざ、

人を見たら泥棒と思え

なのである。そうして、人はそれによって心の安定を得ることができるのである。事情は、我が身をつねって人の痛さを知れ（己をもって人をはかるな）、血は水よりも濃し（兄弟は他人の始まり）でも同様と考えてよい。

以上、ことわざは、人が日々を過ごすにあたって、生活の指針を与えるという教訓的役割を果たしている。と同時に取りあげたことわざが役立たずになった際、あらかじめ用意されたそれとは矛盾する意味のことわざが、その人の欲求不満を処理する合理化の手助けをするという別の役割を果たしていると結論づけることができる。そうして、それを巧みに使いこなすところに、人間の生活の知恵がうかがえるわけである。前にも述べたように、時代の推移とともにことわざの解釈も一部変化していく。それにしても多くのことわざが依然として存続するのは、それがこのような社会的機能を果たしているからである。

（1986・9・20）

引用・参考文献

東洋・欲求と知覚〔相良守次編意識と行動の心理学〕（1955）河出書店

Lewin, K.・Dynamic Theory of Personality（1935年）McgGraw—Hill

宇津木保・ことわざの心理学（1985年）ブレーン出版

大宮録郎・生活習慣についての心理学的研究〔茨城大学文理学部紀要第7号〕(1957年)

滑川道夫・ことわざ読本（1985年）角川書店

鈴木孝夫・ことばと社会（1976年）中央公論社

奥津文夫・日英発想のズレ〔穴田義孝編ことわざの社会心理学——現代のエスプリ201号〕（1984年）至文堂

大宮録郎・茨城県民の政治意識と投票行動に関する調査（1967年）茨城県選挙管理委員会

増原良彦・タテマエとホンネ〔講談社現代新書〕（1984年）講談社

他に

広辞苑（岩波書店）

社会科学大辞典（鹿島出版会）

故事俗信ことわざ大辞典（小学館）

などを参考にした。